広島経済大学研究論集
第46巻第3号　2024年3月
http://dx.doi.org/10.18996/kenkyu2024460302

佼成図書館蔵『首楞厳経』所載「首楞厳神呪」の字音点

坂　水　貴　司*

1.　本稿の目的と研究の方法

1.1　本稿の目的

『首楞厳経』（『大仏頂如来密因修證了義諸菩薩万行首楞厳経』）の巻第七には「首楞厳神呪」（「楞厳呪」などとも呼ばれる）という陀羅尼（呪文）が含まれている。「首楞厳神呪」は禅宗で読まれる陀羅尼であり（禪學大辭典編纂所編 1985［1975］: 1284），中世唐音[1] による字音直読が行われている。この陀羅尼に加点される字音点は中世唐音を調査するための資料としても注目され，有坂秀世（1957［1939］）など中世唐音に関する初期の研究から用いられている。このような諷経資料は中世唐音が借用された鎌倉時代当時の文献における少数の中世唐音語彙と比して豊富な字音注をもつことから，借用した時代における中国語方言の「音韻組織の全貌を髣髴たらしめるに足るものがある」とされる（有坂秀世 1957［1939］: 185）。

本稿で扱う佼成図書館蔵『首楞厳経』（古121/貴1-6B，以下「佼成図書館本」とする）は巻第七のみが所蔵される零本である。この『首楞厳経』に載る「首楞厳神呪」は427句で構成されていることから，「元本」と言われる系統のものであると考えられる（木村俊彦 2003: 154）[2]。

佼成図書館本の巻第七は「首楞厳神呪」の部分のみに訓点の加点がある。この訓点は仮名による字音点であり，全て墨筆によるものである。仮名の点画を縦に長く払うところから，この字音点は室町時代（特に中期以降）の加点であると考えられる[3]。ただし，字音点には誤写とみられるものがあること（片仮名の「ロ」を「ホ」の古い字体「ㅂ」に誤写するなど）から，佼成図書館本の字音点は別の祖本から移点されたものであると考えられる。

この字音点は中世唐音による加点を原則とするものの『聚分韻略』のような韻書ではないため，演繹的な字音の整理が行われていないと推測される。中世唐音は呉音や漢音と比べて体系的に借用されていないため，実際の諷経では類推的な字音が生じたり呉音や漢音が混入したりすることが予想される。そのため諷経資料を扱うことによって類推的な字音や他の字音体系の出現など，中世唐音の体系から外れるもの出現の様相を明らかにすることができると考える。

そこで本稿は佼成図書館蔵『首楞厳経』所載の「首楞厳神呪」に加点される字音点について，中世唐音との対応を確認した上で，中世唐音の体系から外れる例を検証することを目的とする。

1.2　研究の方法

字音点の特徴を整理するための基礎作業として，まず表記上の特徴を整理する。次に佼成図書館本の字音点を中世唐音の典型的な特徴と対照し，佼成図書館本の字音点が中世唐音を反映することを示す。その後，個別的な問題を取り上げ，非体系的な部分にはどのようなものが含まれるか，整理する。

挙例にあたっては，所在を巻頭（「大菩薩阿羅漢」で始まる）から数えた行数で示す。佼成図書館本で「首楞厳神呪」は26行目から始まる。

* 広島経済大学教養教育部助教

虫損や破損によって判読できない字は「■」で示す。また用例中［　］で括った字は残画により推定して読んだ字であることを示す。そのほか用例に対して特別に注記する場合にも［　］で括って示すこととする。

本稿ではしばしば諸文献所載の「首楞厳神呪」の字音点（または読み）と対照することがある。その際に用いる「首楞厳神呪」とは次のものである。

(a)「活宝集」：東洋文庫蔵『活宝集』（貴重書二-B-b-88-0）応永21（1414）年版所載「首楞厳神呪」。所在は原本の丁数・表裏・行数で示す。「首楞厳神呪」は25丁表の１行目（25オ１）から始まる。

(b)「谷村文庫本」：京都大学附属図書館谷村文庫蔵『楞厳呪』（1-23/リ/1貴）永禄12（1569）年写本（字音点は後筆か）。所在は原本の丁数・表裏・行数で示す。谷村文庫本は「首楞厳神呪」のみを載せる本であるため，「首楞厳神呪」は１丁目表の１行目（１オ１）から始まる。

(c)「首楞厳義疏注経」：市立米沢図書館蔵『首楞厳義疏注経』巻第七（米沢善本72）寛永９（1632）年版所載「首楞厳神呪」。所在は版心に付されている丁数により，表裏・行数も示す。「首楞厳神呪」は第４冊の８丁裏の１行目（８ウ１）から始まる。

(d)「花園本」：筆者蔵『花園　首楞厳神呪』。新刷本と思われる。刊記はない。「首楞厳神呪」「大悲円満無礙神呪」「消災陀羅尼」の三つの陀羅尼が載る。所在は原本の１句目（南無薩怛他蘇伽多耶）が始まる行を１行目とする行数で示す。

(e)「現代諷経音」：木村俊彦・竹中智泰（1982）pp. 8–136による。陀羅尼本文は片仮名のみで書かれているため，漢字を他本に従って宛てた。挙例にあたっては他本との対照の便宜から，漢字に片仮名の振り仮名を付す形で挙げる。所在は木村俊彦ほか（1982）の頁数で示す。

2.　佼成図書館本の字音点の表記の特色

2.1　清濁の非標示

各文献所載の「首楞厳神呪」を参照すると，濁点を付さず清濁を区別しない文献と濁点を付すことで清濁を区別する文献がある。次のとおりである。

(a) 濁点を付さないもの

佼成図書館本：南無薩婆勃陀勃地薩跢鞞弊（27）
（ナ モ サ ホ ホ ト ホ チ サン ト ヒ ヒヤ）

首楞厳義疏注経：南無薩婆勃陀勃地薩跢鞞弊（８ウ２）
（サ ホ ホ ト ホ チ サ ト ヒ ヒヤ）

(b) 濁点を付すもの

活宝集：南無薩婆勃陀勃地薩跢鞞弊（25ウ２）
（ナ ム サ ボ ブ ド ブ ヂ サ ト ビイ ビヤ）

谷村文庫本：南無薩婆・勃陀勃地・薩跢鞞弊（１オ３）
（ナ ム サ ボ ブ ド ブ ヂ サ ト ビイ ビヤ）

花園本：南無薩婆勃陀勃地薩跢鞞弊（2）
（ナ ム サ引ボ引 フ ド フ チ引 サ ト ビ ビヤ引）

清濁の区別をするかどうかは，写本か刊本によらないようである。佼成図書館本・谷村文庫本は写本，その他諸本は刊本である。上の例のとおり，写本であっても刊本であっても濁点を付すものも付さないものもある。

佼成図書館本では清濁の区別を行わないため，中世唐音形の検討を行う際にも清濁の観点は除かれることになる。

2.2　斉韻字の「㋑」表記

中国語中古音における斉韻字［-ɛi, -uɛi］[4] は中世唐音資料では「㋑イ」で表記され[5]，止摂の諸韻［-ɪě, -iě, -yě, -yě, -ɪi, -i, -yi, -yi, -ɪǒɪ, -iǒi, -yǒi］に対する「㋑」表記と区別される場合がある（高松政雄 1992［1982］: 586–587，湯沢質

幸 1987: 76–78)。しかし佼成図書館本の字音点は斉韻字の「㋑イ」表記箇所が少なく3例のみ(「醯」字に加点される3例)であり，多くは「㋑」で表記される。

各文献所載の「首楞厳神呪」における斉韻字表記は次のとおりである。

(a) 斉韻字の「㋑」表記を中心とするもの
佼成図書館本：阿羅訶帝三藐三菩陀寫（26）
首楞厳義疏注経：阿羅訶帝三藐三菩陀寫（8ウ1）

(b) 斉韻字の「㋑イ」表記を中心とするもの
活宝集：阿羅訶帝三藐三菩陀寫（25オ6）
谷村文庫本：阿羅訶帝三藐三菩陀寫（1オ1）
花園本：阿羅訶帝三藐三菩陀 寫 （1）

このように「㋑」表記をとるか「㋑イ」表記をとるかはそれぞれの本における表記体系の違いによると考えられる。そのため斉韻字を「㋑」表記するか「㋑イ」表記するかという違いは音韻論的な違いを反映しているものではないと考えられる。

佼成図書館本の字音点を中世唐音の特徴と対照する際にも，斉韻字と止摂諸韻の字は表記上同一のものになっているため，斉韻字と止摂諸韻の区別に関する観点は除かれることになる。

2.3　カ行ウ段拗音の「キウ」表記

カ行ウ段拗音の表記方法としては「キウ」「キユ」の2種が考えられる。

(a)「キウ」表記
佼成図書館本：南無薩多南三藐三菩陀俱知南（29）
首楞厳義疏注経：南無薩多南三藐三菩陀俱知南（8ウ4）

(b)「キユ」表記
活宝集：南無薩多南三藐三菩陀俱知南（25ウ3）
谷村文庫本：南無薩多南三藐三菩陀・俱知南（1オ4）
花園本：南無薩多南三藐三菩陀俱知南（4）

カ行ウ列の拗音について「キユ」表記は呉音や漢音に存在せず，中世唐音・近世唐音には存在するものであるという（肥爪周二 2005: 205–206)。一方「キウ」表記は呉音や漢音にも存在する表記方法である。カ行ウ列拗音について，佼成図書館本は伝統的な漢字音の表記方法を踏襲していると言える。

ただしこれも表記上の問題であって，佼成図書館本で「キウ」で表記されていることがそのまま2拍で発音されていたことを示すものではないと考える。「首楞厳神呪」という同じ陀羅尼に「キユ」「キウ」の2種の表記が現れることから，「キウ」と書かれていても実際は1拍で発音されることもあったと推測される。

3.　中世唐音の典型的特徴との対照

佼成図書館本の字音点は基本的に中世唐音を反映すると言える。以下では，中世唐音の典型的な特徴（有坂秀世 1957［1939]: 192–207・奥村三雄 1973: 168–169，沼本克明 2023［1986]: 273–278，肥爪周二 2005: 207–208）と佼成図書館本の字音点を対照し，佼成図書館本の字音点が中世唐音を反映することを示す[6)]。

以下では中世唐音の典型的な特徴に合致しない例に対して「△」印をつけ，典型的な特徴に合致する例と区別する。ただし中世唐音は比較的揺れが大きいことが指摘されており（肥爪周二 2005: 207)，以下各項目の典型的な特徴に合わないことが直ちに中世唐音であることを否定するものではない。

3.1　舌上音のサ行（ザ行）表記

中国語中古音の舌上音［ʈ-, ʈʰ-, ɖ-］は，中世

唐音においてサ行（ザ行）で受け入れる。これは中世唐音の供給元の中国語音が破擦音化していた一方，中世唐音が借用された当時の日本語の「チ」「ヂ」「ツ」「ヅ」が破擦音化しておらず破裂音であったことが要因である（有坂秀世 1957［1939］: 196–197）。

佼成図書館本でも中国語中古音の舌上音にあたる字には，次のようにサ行（ザ行）の仮名音注が加点される。

知シ（７例：薩怛他佛陀俱知瑟尼鈔［27］ほか）
吒サ（15例：薩囉婆突瑟吒［65］ほか）
　シヤ（２例：迦吒補丹那掲囉訶［112］ほか）
持シ（２例：摩訶般囉戰持［72］ほか）
丈シヤ（３例：波囉丈耆囉闍耶泮［162］ほか）
宅サ（１例：宅袪革茶耆尼掲囉訶［180］）
稚シ（１例：嚧闍那跋闍囉頓稚遮［85］）
茶サ（11例：帝唎茶輸囉西那［45］ほか）
柱シユ（３例：鞞沙闍耶倶嚧吠柱唎耶［51］ほか）
墜スイ（１例：墜帝藥迦［184］）
遲シ（１例：羯囉檀遲曳泮［166］）

舌上音のサ行（ザ行）表記については例外がないため，すべて中世唐音の典型的な形と一致していると言える。

3.2　暁母字のカ行・ハ行表記

中国語中古音の暁母字［h-］は中世唐音でカ行（一部ハ行）で受け入れられる。佼成図書館本では次のように，全てカ行であらわれる。

喝カ（３例：跋闍囉喝薩多遮［81］ほか）
　ケ（１例：跋闍囉制喝那阿遮［76］）
漢カ（１例：南無盧雞阿囉漢跢喃［30］）
　カン（１例：阿囉漢訖唎擔毗陀夜闍嗔陀夜彌［138］）
呼コ（１例：呼藍突悉乏難遮那舍尼［70］）
虎ク（９例：虎舛［90］ほか）
迄キ（迄唎夜輸藍［190］）
訶コ（103例：阿羅訶帝三藐三菩陀寫［26］ほか）
醯キ（５例：娑醯夜耶［37］ほか）
　キイ（３例：什伐囉堙迦醯迦［184］ほか）

このように佼成図書館本ではハ行表記の例が存在しない。しかし，このことは佼成図書館本が中世唐音の形を含んでいないことを意味するわけではない。

暁母字は「カ行の形で現れる」ことが原則であり，ハ行で現れるのは中国語の原音が「頭音の直後に〔y〕類の要素を含んでゐた場合に殆ど限られてゐる」という（有坂秀世 1957［1939］: 203）。また湯沢質幸によれば，「鍾・微（合）・庚（合）各韻三等に凶 輝兄略韻などと現われることがある」という（湯沢質幸 1987: 144）。佼成図書館本の暁母字には「鍾・微（合）・庚（合）各韻三等」が存在しないため，ハ行で現れる条件に該当するものがなかったと考えられる。そのため佼成図書館本の暁母字はカ行表記のみであるものの，中世唐音としては原則的な形であると言える。

3.3　止摂開口歯音字のイ・ウ列表記

中国語中古音の止摂開口字［-ɪĕ, -iĕ, -ɪi, -i, -ɪəɪ, -ɪəi］の歯音字は「シ」「ス」で受け入れられる。佼成図書館本でも次のように「シ」「ス」の両表記が認められる。

師ス（１例：三補師悉多［53］）
私ス（１例：囉叉私掲囉訶［109］）
　シ（１例：婆私儞曳泮［168］）

肆ス（1例：肆引伽弊掲囉唎藥叉怛囉芻［199］）
尸シ（4例：尸■摩舎那泥婆悉泥［41］ほか）
視シ（7例：南無阿婆囉視躭［60］ほか）
史シ（1例：布史波訶囉［174］）

また中世唐音では『韻鏡』二等位置（莊母 tʂ-, 初母 tʂʰ-, 崇母 dʐ-, 生母 ʂ-, 俟母 ʐ-）または四等位置（精母 ts-, 清母 tsʰ-, 従母 dz-, 心母 s-, 邪母 z-）の音に「ス」が出やすいことが知られている（奥村三雄 1973: 168，湯沢質幸 1987: 145）。

そこで，前掲の諸字を『韻鏡』の転図上の位置にしたがって分類すると次の表1のようになる。

表1　『韻鏡』位置と「シ」「ス」表記

『韻鏡』位置	「シ」	「ス」
二等	史シ	師ス
三等	尸シ	（用例なし）
	視シ	
四等	私シ	私ス
		肆ス

表1より，「シ」は二等・三等・四等の各位置に出現する一方，「ス」は二等・四等位置にのみ出現する。

以上より，止摂開口歯音字のイ・ウ列表記の点でも佼成図書館本は中世唐音を反映していると考えられる。

3.4　魚韻字のイ列表記

中世唐音では魚韻字［-ɪə］がイ列で現われる。佼成図書館本では次のとおりである。

女ニ（3例：闍多訶唎女［117］ほか）
袪△キウ（1例：宅袪革茶耆尼掲囉訶［180］）

上の例のうち，「女」字にイ列の仮名が加点される点で中世唐音の特徴を示すと言える。

「袪」字の「キウ」は中世唐音と考えるべきではないのであろうか。この「袪」字は，諸文献所載の「首楞厳神呪」で次のように現れる。

(a)「キ」表記
花園本：宅袪革茶耆尼掲囉訶（158）
現代諷経音：宅袪革茶耆尼掲囉訶（118）
(b)「キユ」〜「キウ」表記
活宝集：宅袪革茶耆尼掲囉訶（39ウ6）
谷村文庫本：宅袪革茶耆尼・掲囉訶（13ウ4）
首楞厳義疏注経：宅袪革茶耆尼掲囉訶（18オ5）

花園本・現代諷経音では中世唐音として期待される「キ」が現れる。その一方，活宝集・谷村文庫本・首楞厳義疏注経には「キユ」「キウ」表記が現れ，佼成図書館本と同様の音注が付されていると言える。

この「袪」字は呉音「コ」，漢音「キョ」が期待される[7]。佼成図書館本・活宝集・谷村文庫本・首楞厳義疏注経に現れる「キユ」「キウ」表記は「魚韻字のイ列表記」という原則には当てはまらないものの，呉音・漢音と一致しないため，中世唐音の形であると考えるべきであろう。

3.5　斉韻字のイ列表記

中国語中古音の斉韻字［-ɛi, -uɛi］は中世唐音でイ列で現われる。佼成図書館本では次のとおりにあらわれる。

西シ（2例：帝唎茶輸囉西那［46］ほか）
提チ（7例：南無提婆離瑟赧［33］ほか）
泥ニ（4例：南無跋囉訶摩泥［35］ほか）
翳△エイ（2例：翳曇婆伽婆多［59］ほか）

醯キ（５例：婆醯夜耶［37］ほか）
キイ（３例：什伐囉堙迦醯迦［184］ほか）
雞キ（21例：南無盧雞阿囉漢跢喃［30］ほか）
△ケ（１例：刺怛那雞都囉闍耶［57］）

上の例のうち「翳」（２例）「雞」（１例）の２字３例が例外となるものの，その他の例はイ列表記である。斉韻字のイ列表記という点でも，佼成図書館本の字音点は中世唐音の特徴と一致していると言える。

例外となる「翳」字については「4.2.1　諸文献所載の「首楞厳神呪」で共通する例」で述べる。また「雞」の１例（「ケ」）については諸文献所載の「首楞厳神呪」でも類例を見いだせず，佼成図書館本内部でも「キ」が中心的であることから，個別的に呉音が混入したものであろう。

3.6　歌・戈・桓韻字のオ列表記

中国語中古音の歌韻字［-ɑ］・戈韻字［-ɪɑ, - uɑ, - ʏɑ］は中世唐音でオ列で受け入れられる。桓韻字［-uɑn］の一部もオ列で受け入れられる。

まず佼成図書館本における歌韻字の例は次のとおりである。

阿ヲ（41例：阿羅訶帝三藐三菩陀寫［26］ほか）
他ト（17例：南無薩怛他蘇伽多耶［26］ほか）
多ト（67例：南無薩怛他蘇伽多耶［26］ほか）
陀ト（88例：阿羅訶帝三藐三菩陀寫［27］ほか）
△タ（１例：槃遮摩訶三慕陀囉［38］）
那ノ（46例：南　蘇　盧多婆那喃［30］ほか）
訶コ（103例：阿羅訶帝三藐三菩陀寫［26］ほか）
跢ト（15例：南無薩婆勃陀勃地薩跢鞞弊［28］ほか）
婆ソ（17例：婆舍［「金」に誤写］囉婆迦僧伽喃［29］ほか）
ホ（１例：婆婆訶囉［172］※「婆」字の音）
△ス（１例：囉刹婆掲囉訶［177］）
△サ（５例：舍波奴掲囉訶娑訶婆囉摩他喃［34］ほか）
羅△ラ（６例：阿羅訶帝三藐三菩陀寫［26］ほか）
囉ホ（１例：末囉鞞囉建跢囉［197］※「ロ」を「ホ」の古い字体と誤ったもの）
△ラ（237例：娑舍［「金」に誤写］囉婆迦僧伽喃［29］ほか）
△ヤ（１例：南無因陀囉耶［35］）
邏△ラ（１例：羯邏囉怛唎曳泮［167］）

例外が認められるものの，歌韻字の例はオ列表記が中心的である。

次に戈韻字の例は次のとおりである。

頗ホ（１例：頗囉訶囉［174］）
波ホ（27例：三藐伽波囉底波多那喃［32］ほか）
婆ホ（110例：南無薩婆勃陀勃地薩跢鞞弊［28］ほか）
モ（１例：莎婆訶［207］）
△フ（１例：荼耆尼什婆囉［195］）
摩モ（33例：舍波奴掲囉訶娑訶婆囉摩他喃［34］ほか）
コ（１例：跋闍囉摩禮底［75］）
△マ（14例：阿播悉摩囉掲囉訶［113］ほか）
■（１例：尸摩舍那泥婆悉泥［41］）
莎ソ（２例：莎悉帝薄婆都［101］ほか）

麼モ（8例：印兎那麼麼寫［87］ほか）
△マ（4例：麼麼［102］ほか）
埵ト（2例：怛埵伽嚧茶西訖唎擔［126］ほか）
播△ハン（2例：阿播悉摩囉掲囉訶［113］ほか）
△ハ（1例：薩婆阿播悉摩嚧弊泮［155］）
佉△キ（1例：目佉嚧鉗［188］）
伽△キヤ（47例：南無薩怛他蘇伽多耶［26］ほか）

このように戈韻字についてもオ列表記が中心的である。中世唐音の原則に合うものと考えられる。

桓韻字の例は次のとおりである。

般ホ（26例：烏摩般帝［36］ほか）
槃ホ（8例：槃遮摩訶三慕陀囉［38］ほか）
△ハン（2例：鳩槃茶掲囉訶［111］ほか）
泮△ハ（6例：泮吒［148］ほか）
△ハン（38例：阿牟迦耶泮［149］ほか）
鉢ホ（2例：毗迦薩怛多鉢帝唎［146］ほか）
末モ（6例：摩訶末怛唎迦拏［163］ほか）
跋ホ（25例：南無跋囉訶摩泥［35］ほか）

以上の例より，歌・戈・桓韻字にはオ列の表記例がまとまって認められる。このことは佼成図書館本の字音点が中世唐音を反映することを示す。

ただしこれらの例の中には「囉」字や「伽」字のように，例外的な振る舞いをするものが主となる字がある。これらについては「4.　個別的な事例の検討」で検討する。

3.7　-ŋ 韻尾の一部の「―ン」表記

-ŋ 韻尾のうち，梗摂［-aŋ, -ɪaŋ, -iɛŋ, -uaŋ, -ʏaŋ, -yɛŋ, -ɐŋ, -ɪɛŋ, -ɛŋ, -uɐŋ, -uɛŋ］・曾摂［-əŋ, -ɪðŋ, -ɪěŋ, -uəŋ］の韻尾が「―ン」で表記される。通摂［-ŏuŋ, -ɪəuŋ, -oŋ, -ɪoŋ］の一部も「―ン」で表記されることがある。

佼成図書館本で -ŋ 韻尾は次のように現れる。

(a) 梗摂字の例
罌アン（1例：吒吒罌迦［100］）
丁△チ（1例：摩訶波囉丁羊乂耆唎弊泮［161］）
儜△ニ（1例：般唎怛囉耶儜掲唎［63］）

(b) 曽摂字の例
崩ヘン（4例：毗多崩薩那羯唎［69］ほか）
凌サン（1例：薩般嚧訶凌伽［196］）
騰△ト（3例：勃騰罔迦［76］ほか）
僧△ス（1例：娑舍［「金」に誤写］囉婆迦僧伽喃［29］）
氷△ヒ（1例：阿瑟吒氷舍帝南［67］）

(c) 通摂字の例
甕△ヨウ（1例：虎㽞都嚧甕泮［207］）
雍△ヨウ（6例：都嚧雍［90］ほか）

(a) の梗摂，(b) の曽摂において韻尾が表記されている例ではいずれも「―ン」で表記されており，中世唐音の特徴と一致する（呉音は「―ウ」，漢音は「―ウ」「―イ」で表記される。沼本克明 2023［1986］: 42–44）。

(c) の通摂では，いずれも「―ウ」表記である。語例が少ないために確実なことは言えないものの漢音形の混入と推定される[8]。

3.8　入声韻尾の無表記

入声韻尾は日本呉音・日本漢音では仮名表記する場合，「―フ」「―ツ」「―ク」「―チ」「―キ」の仮名によって表記されるのを基本とする（例：急キフ，仏ブツ，北ホク　など）。しかし中世唐音では中国語における入声韻尾の消失を反映し，入声韻尾が表記されないことがある

（沼本克明 2023［1986］: 277）。

佼成図書館本には入声字が332例出現する。しかし入声韻尾が表記されるのは次の２例のみである。

堀蘇母婆羯囉跢那（82）
室嚧吉帝（187）

このように入声韻尾が表記されない傾向がある点も中世唐音の特徴と一致する。

4.　個別的な事例の検討

4.1　類推的な字音の存在

諸声符による類推で中世唐音形が生じたと見られる例もある。

「佉」「伽」の２字はいずれも『広韻』の体系で戈韻三等に位置づけられる。戈韻三等の中世唐音形としては「コ」という音注が期待される。

しかし佼成図書館本では，これらの２字に対して次のような音注加点がある。

佉△キ（１例：目佉嚧鉗［188］）
伽△キヤ（47例：南無薩怛他蘇伽多耶［26］ほか）

これらの２字について諸文献所載の「首楞厳神呪」では次のような音注が認められる。

(a)「佉」字の例
活宝集：目佉嚧鉗（40ウ３）
谷村文庫本：目　佉　嚧鉗（14オ６）
首楞厳義疏注経：目佉嚧鉗（18ウ５）
花園本：目佉嚧鉗（166）
現代諷経音：目佉嚧鉗（124）

(b)「伽」字の例
活宝集：南無薩怛他蘇伽多耶（25オ６）
谷村文庫本：南無薩怛他蘇伽多耶（１オ１）
首楞厳義疏注経：南無薩怛他蘇伽多耶（８ウ１）
花園本：南無薩怛他。蘇伽多耶（1）
現代諷経音：南無薩怛他蘇伽多耶（8）

このように，諸文献所載の「首楞厳神呪」でも期待される「コ」という音注は出現しない。

まず「佉」字に対する佼成図書館本の「キ」という音注は，諸声符「去」による類推であると考えられる。「去」は魚韻三等であるため，中世唐音では「キ」という音注が期待される。この「キ」は佼成図書館本ほか谷村文庫本・花園本・現代諷経音に認められる「キ」と一致する。

また「伽」字に対する佼成図書館本の「キヤ」という音注は，同じく諸声符「加」をもつ「迦」からの類推であると考えられる。「迦」は麻韻二等開口の音をもち，中世唐音を反映する資料でも「キヤ」という音注が出現する。たとえば中世唐音の資料としてしばしば活用される『小叢林略清規』には「釈-迦牟-尼-佛」（中２オ５）のような音注がある。

このように，韻書の体系から外れると見られる例の中には，諸声符による類推によって生じたと認められる音注が指摘できる。

4.2　呉音・漢音の例

4.2.1　諸文献所載の「首楞厳神呪」で共通する例

中世唐音の形でないと判断されるものの，諸文献所載の「首楞厳神呪」で一致するものがある。「羅」「囉」「邏」字がその例である。

これら「羅」「囉」「邏」字は佼成図書館本で「ラ」が加点されている。『首楞厳経』諸本でも同様に「ラ」表記されるのが基本である[9]。３字それぞれの例を各本につき１例ずつ挙げると次のとおりである。

(a)「羅」字の例

佼成図書館本：阿羅訶帝三藐三菩陀寫（26）

活宝集：阿羅訶帝三藐三菩陀寫（25オ６）

谷村文庫本：阿羅訶帝三藐三菩陀寫（１オ１）

首楞厳義疏注経：阿羅訶帝三藐三菩陀寫（８ウ１）

花園本：阿羅訶帝三藐三菩陀寫（1）

現代諷経音：阿羅訶帝三藐三菩陀寫（8）

(b)「囉」字の例

佼成図書館本：三藐伽波囉底波多那喃（32）

活宝集：三藐伽波囉底波多那喃（26オ１）

谷村文庫本：三藐伽波囉・底波多那喃（１ウ２）

首楞厳義疏注経：三藐伽波囉底波多那喃（９オ２）

花園本：三藐伽波囉底波多那喃（7）

現代諷経音：三藐伽波囉底波多那喃（11）

(c)「邏」字の例[10)]

佼成図書館本：羯邏囉怛唎曳泮（167）

活宝集：羯邏囉怛唎曳泮（38ウ３）

首楞厳義疏注経：羯邏囉怛唎曳泮（17オ８）

花園本：羯邏囉怛唎曳泮（145）

現代諷経音：羯邏囉怛唎曳泮（111）

これらの字は歌韻字［-ɑ］であるため，中世唐音の形としては「ロ」が期待される。諸文献所載の「首楞厳神呪」で「ロ」が出現しないのは，「首楞厳神呪」の読誦音として呉音または漢音の「ラ」が採用されているためであると考えられる。たとえば『活宝集』に載る「消災陀羅尼」には「消災陀羅尼」（46オ６）と加点されている。また『小叢林略清規』には「金-剛般若波羅密経」（下１オ５）の例が出現するほか，『聚分韻略』慶長17（1612）年版でも「羅」「囉」「邏」左傍字音点として「ロ」が付されている（「羅」は45ウ３，「囉」は46オ２，「邏」は44オ９）ため，中世唐音の形として「ロ」を選択することは十分に可能であったと考えられる。しかし「首楞厳神呪」に「ラ」が多く出現するのは，「首楞厳神呪」の読誦音で呉音形または漢音形の「ラ」を使用することが一般的であったからであろう。

次に「翳」字は斉韻字であり，中世唐音形としては「イ」（「イ丶」）という字音点が期待される。諸文献所載の「首楞厳神呪」で次のように現れる。

(a)「エイ」系統の字音点

佼成図書館本：翳曇婆伽婆多（59）

谷村文庫本：翳曇婆伽婆多（３ウ３，ただし「エ」は某字に重書か）

首楞厳義疏注経：翳曇婆伽婆多（10ウ５）

花園本：翳曇婆伽婆多（37）

現代諷経音：翳曇婆伽婆多（44）

(b)「イイ」系統の字音点

活宝集：翳曇婆伽婆多（28ウ１）

このように「翳」字は諸文献所載の「首楞厳神呪」で「エイ」系統の字音点が多く認められる。その一方「イイ」という中世唐音形も認められるので，中世唐音形としては「イイ」が存在していたと考えられる。「エイ」系統の字音点は「首楞厳神呪」の読誦音として漢音形が広まっていたことを示すものと考えられる。

以上，中世唐音を示す文献の中で，特定の字が安定して呉音形または漢音形で出現する例を見た。これらは「首楞厳神呪」の読誦音として特定の字に非中世唐音形が採用されたものと考えられる。

4.2.2　諸文献所載の「首楞厳神呪」で共通しない例

一方，諸文献所載の「首楞厳神呪」で共通しない例も出現する。諸本で共通しないことから，これらの例は「首楞厳神呪」読誦音とは考えられない。

まず，特定の語において特別な音形が出現する場合がある。

「婆」字は戈韻一等の字［-uα］であり，中世唐音形としは「ボ」が期待される。本資料でも，「婆」字全112例のうち110例が「ホ」である。しかし残りの１例が「フ」，もう一例が「モ」である。

茶耆尼什婆囉（195）
莎婆訶（207）

佼成図書館本で「婆」には110例の「ホ」加点例があることから，佼成図書館本でも中世唐音形は基本的に「ボ」であったと考えられる。「フ」「モ」の両例は中世唐音だけでなく呉音・漢音による説明もつかない形である。

諸文献所載の「首楞厳神呪」に目を向けると，花園本ならびに現代諷経音では佼成図書館本と同様の例が認められる[11]。

(a) 花園本
茶耆尼什婆囉（173）
莎婆訶（186）
(b) 現代諷経音
茶耆尼什婆囉（127）
莎婆訶（133）

このように同じ箇所が同じ語形で出現することから，偶然の一致であるとは考えにくい。これら「婆」字が特定の語で中世唐音形と一致しないのは，伝承される「首楞厳神呪」の読みに語を単位として非中世唐音形が選択されることがあったためと考えられる[12]。

語によって音形が異なる例としては他にも「都」字がある。佼成図書館本では「都」字に対して「ツ」「ト」の二種類の加点がある。それぞれ次のような例である。

(a)「ツ」の例
都嚧雍（90・91・91・93・94・96）
虎 斛 都嚧甕泮（207）
(b)「ト」の例
剌怛那雞都囉闍耶（57）
薩怛他伽都瑟尼鈔（59・90・97）
赭都囉失帝南（65）
薩婆舍都嚧儞婆囉若闍（70）
掘梵都（87）
者都囉尸底南（95）
莎悉帝薄婆都（101）
南無粹都帝（144）
者都囉縛耆儞弊泮（159）

これらの例から佼成図書館本における「ツ」と「ト」の使い分けは，「都嚧雍」（または異表記形「都嚧甕」）という語[13]であれば「ツ」が用いられ，その他の語であれば「ト」が用いられるという傾向が認められる[14]。

他の中世唐音資料を参照すると，『小叢林略清 規』に「都-無 惱-亂」（下22オ２），慶 長17（1612）年版『聚分韻略』に「ツ」（15オ６）とあることから，中世唐音形は「ツ」であったと考えられる。佼成図書館本で中世唐音形「ツ」が使用される語は「都嚧雍」に限定され，それ以外の語には「ト」が使用されていることから，佼成図書館本では漢音形の「ト」が基本であったと考えられる。

また「無」字は中世唐音で「ブ」「ム」という形が期待される[15]。そのため「首楞厳神呪」諸本にでも「ム」という音注が確認される。ところが佼成図書館本では全例「モ」という音注が加点されている。

南無薩怛他蘇伽多耶（32例：［26］ほか）

当該範囲の「無」字は「南無」という語のみである。「南無」以外での「無」の例が出現し

ないために検証はできないものの，「南無」という語に偏って出現したという可能性がある。

4.3　ハ行転呼音と見られる例

佼成図書館本には次のような音注加点例がある。

視比（シキト）［「北」に誤写］多訶（コ）唎（リ）南（ナ）（117）
視毖（シキト）多訶（コ）囉（ラ）（173）

これら2例に共通するのは「視」に「シキ」という2字の字音点が加点されていることと，「多」字に加点されることが期待される字音点「ト」が「比」「毖」字に加点されていることである。

このことから想定されるのは，句の2字目「比」「毖」に「ハ行転呼」（語中のハ行がワ行化する現象。ただし室町時代においてここで取りあげるワ行イ列はア行 /i/ に合流している）が起こっているということである。これにより「視比」「視毖」は「視」の長形のように把握されたため，「視」字に「シキ」という2字の字音点が加点されているものと考えられる。その結果「多」字に加点されるべき字音点も1字分ずれたものであろう。

通常漢語は「ハ行転呼」を起こさず，語中であってもハ行の音を維持する。これらの2例は原則と異なって「ハ行転呼」を起こしたことになる。これは佼成図書館本での音注の加点が通常の漢語に対するものではなく，陀羅尼に対するものであるためかもしれない。通常の漢語は一字が一形態素を担うため，意味的な切れ目が見えやすい。そのため通常の漢語は各字の頭音が形態素頭の環境にあることから，「ハ行転呼」が生じにくいと考えられる。一方陀羅尼の場合，漢字は音訳漢字であるために意味を担わず，各字の頭音と形態素頭は一致しない。そのため，「ハ行転呼」が発生したと推測される。

5.　ま　と　め

以上本稿では佼成図書館蔵『首楞厳経』の字音点の特徴をとらえるため，まず字音点の表記上の特色を明らかにした上で，中世唐音形が用いられていることを確認した。続いて中世唐音の形から外れる例があることを検証し，次のようなことを指摘した。

① 類推による字音と見られる例があること
② 「首楞厳神呪」の読誦音として特定の字に安定して呉音や漢音が使用されることがあること
③ 語によって中世唐音形と非中世唐音形が使い分けられることがあること
④ 「ハ行転呼音」の例があること

中世唐音の研究では字音としての体系性を重視するため，体系的に異質である部分は取り除かれて研究される場合が多い。しかし特定の文献を扱うことで，呉音や漢音などの他の字音体系との関係や語による字音の使い分けなど，これまでも呉音や漢音の研究で行われてきた方法を導入することが可能であると考える。

その一方，そもそも揺れの多い中世唐音から体系的に異質である部分を抽出することは容易ではない。今後は他の中世唐音資料に対象を広げて，同様に記述を行うことで，どのような要素が出現するのか一つひとつ取り上げて考えることが必要である。

［謝辞］
資料の閲覧に際し，佼成図書館，東洋文庫の皆様には格別のお取りはからいを賜りました。記してお礼申し上げます。
本稿は科学研究費補助金「資料横断的な漢字音・漢語音データベースの拡充と運用に向けた基礎的研究」（基盤研究 B・研究課題番号：22H00665）の成果の一部です。

注

1）　唐音に関する呼称は多様である。本稿では肥爪周二（2005: 201）により，「鎌倉時代以降，臨済宗・曹洞宗において仏典読誦などに用いられた音」を「中世唐音」の用語で示すこととする。

2）　ただし句数は宮内庁書陵部蔵の宋版一切経本『首楞厳経』（開元寺版，406・53）とも一致するため，427句の本が元の時代に由来するかどうかは定かでない。ただ宮内庁書陵部蔵の開元寺版では第３句の反切が「毗迦反」である一方，佼成図書館本では「毗迦切」になっている。「○○反」よりも「○○切」の方が新しい形式であるらしい（日本中国語学会編2022: 527）。

3）　佼成図書館本の仮名字体は広島大学図書館蔵『悉曇初心鈔』文明15（1483）年写本（国文N2266）の仮名字体に類似する。同一の筆跡ではないものの，同時代の筆跡であると考えられる。

4）　中国語中古音の推定音価は平山久雄（2022: 115–119）による。

5）　沼本克明（2023［1986］: 34–35）にしたがって，母音列の片仮名を○で囲うことによって当該列の仮名全体を指すこととする。たとえば「㋑」と書くことで「イ，キ，シ，チ，……」などイ列全ての仮名を表す。

6）　中世唐音を定義する特徴には本文で取り上げるもの以外にも，「疑母［ŋ-］のア・ヤ・ワ・ナ行表記」「匣母［ɦ-］のア行表記」「灰韻［-uʌi］・泰韻合口［-uɑi］のウ列＋イ表記」がある。疑母は佼成図書館本で「乂」字のみが出現するものの，「叉」字に相当する音注「シヤ」が加点されている。そのため疑母の確実な例はないため本稿で言及しない。また匣母字の例と灰韻・泰韻合口字の例は佼成図書館本に音注加点例が出現しないため，疑母字同様に本稿では言及しない。

7）　呉音「コ」については呉音資料である京都大学文学研究科図書館蔵本『倶舎論音義』の「平袪(去)音コ」（５オ６）によって例証される。漢音「キョ」については漢音資料である静嘉堂文庫蔵清原宣賢点『毛詩鄭箋』永正18（1521）―天文４（1535）年ごろ点の「袪(キヨ)は袂(ヘイ)（なり）」（④248，⑥101）によって例証される。

8）「雍」字は呉音資料である高山寺蔵『貞元華厳経音義』で「雍(ヲウ)(去)和(ワ)(上)　於恭反」（12ウ７），「雍(ヲウ)(去)穆(ホク)(入濁)　於恭反」（21オ６）という音注が確認できる。これによって呉音ではないことが推定される。また中世唐音資料の京都大学附属図書館蔵『聚分韻略』慶長17（1612）年版では「雍」（４オ４）の左傍に「ユン」と加点されていることから，佼成図書館本の「ヨウ」は中世唐音でもないと推定される。一方漢音資料の宮内庁書陵部蔵『群書治要』経部建長７（1255）年点には「肅(入)-雍(キヨウ)(平)」（③53）の例が出現する。この例より，佼成図書館本の当該例は漢音形であると考えられる。

9）　本によっては「阿囉漢」という語が含まれている句で「ロ」が出現する場合がある。「ロ」が出現するのは活宝集「南無盧雞阿囉漢跢喃（ナムルキイヲロカントナム）」（25ウ４），同「阿囉漢訖唎擔毗陀夜闍嗔陀夜彌（ヲロカンキリタムビドヤジヤシンドヤミ）」（35ウ６），谷村文庫本「南無盧雞・阿囉漢跢喃（ナムルキイ　ヲロカントナム）」（１オ５），同「阿囉漢・訖唎擔・毗陀夜闍・嗔陀夜彌（ヲロカン　キリタン　ビトヤシヤ　シントヤミ）」（10オ４），である。佼成図書館本，首楞厳義疏注経，花園本，現代諷経音の対応箇所はいずれも「ラ」である。

10）　谷村文庫本の該当箇所は「羯囉々怛（ゲララタ）・唎曳泮（リイホン）」（12ウ３）であり，本文の字に違いが生じている。

11）　活宝集・谷村文庫本・首楞厳義疏注経の三本では「ボ（ホ）」のように，中世唐音として期待される形が現われる。

12）　ただし，「茶耆尼什婆（サキニシフラ）囉」（195）「莎婆（ソモコ）訶」（207）のような語形を取る理由は明らかでない。さらに考えたい。

13）「首楞厳神呪」の元となったという「白傘蓋陀羅尼」の対応箇所を参照すると，「都嚧雍」も「都嚧甕」もサンスクリット形は同じ “trūm” という語であるようである（木村俊彦 2013: 420, 417）。これは「意味不明の語」（木村俊彦ほか 1982: 75）であるらしい。

14）　この傾向は「首楞厳神呪」他本では認められない。他本では「ツ」で統一するのを基本とする。

15）　中世唐音資料の『小叢林略清規』にも「十(ジ)-方無(ブ)-量(フ)-佛(ハ)」（中１ウ５），「浄(ジン)-法(ハ)界(カイ)-身(シン)本(ホン)-無(ム)出(シユ)-没(モム)」（下19ウ２）という形で「ブ」「ム」両例が出現する。

依　拠　資　料

『活宝集』東洋文庫蔵（貴重書二-B-b-88-0）応永21（1414）年版：原本調査による。京都大学附属図書館蔵本（1-25/カ/1貴，「京都大学貴重資料デジタルアーカイブ」https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00012924，2023年12月28日確認）も参考にした。

『倶舎論音義』京都大学文学研究科蔵：西崎亨（2010）『倶舎論音義の研究』思文閣出版による。

『群書治要』宮内庁書陵部蔵経部建長７（1255）年点：尾崎康・小林芳規解題（1989）『古典研究會叢書漢籍之部　第九巻　群書治要（一）』汲古書院による。用例の検索は佐々木勇（2009）『平安鎌倉時代における日本漢音の研究　資料篇』汲古書院による。

『悉曇初心鈔』広島大学図書館蔵文明15（1483）年写本（国文N2266）：「国書データベース」https://doi.org/10.20730/100375608（2023年12月28日確認）による。

『聚分韻略』京都大学附属図書館蔵慶長17（1612）年版（4-06/シ/48貴）：奥村三雄（1973）による。

『首楞厳経』宮内庁書陵部蔵開元寺版（406・53）：「宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧――書誌書影・全文影像データベース――」https://db2.sido.keio.

ac.jp/kanseki/bib_detail?bibid=007075（2023年12月28日確認）による。
『首楞厳経』佼成図書館蔵本（古121/ 貴1-6B）：原本調査による。
『首楞厳義疏注経』（巻第七）市立米沢図書館蔵（米沢善本72）寛永９（1632）年版：「市立米沢図書館デジタルライブラリー」https://www.library.yonezawa.yamagata.jp/dg/AA072.html（2023 年12月28日確認）による。
『貞元華厳経音義』高山寺蔵：高山寺典籍文書綜合調査團編（1983）『高山寺古辭書資料第二（高山寺資料叢書十二册）』東京大學出版會による。
『小叢林略清規』沼本克明旧蔵本貞享元（1684）年序：沼本克明（1986）「鎌倉宋韻資料―小叢林略清規―」鎌倉時代語研究会編『鎌倉時代語研究』９，武蔵野書院，pp. 189–264による。
『花園　首楞厳神呪』筆者蔵：原本による。
『毛詩鄭箋』静嘉堂文庫蔵清原宣賢点永正18（1521）―天文４（1535）年ごろ点：米山寅太郎・築島裕編（1992）『古典研究會叢書　漢籍之部　第一巻　毛詩鄭箋（一）』汲古書院による。
『楞厳呪』京都大学附属図書館谷村文庫蔵（1-23/リ/1貴）永禄12（1569）年写本：「京都大学貴重資料デジタルアーカイブ」https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00009403（2023年12月28日確認）による。

参　考　文　献

有坂秀世（1939）「諷経の唐音に反映した鎌倉時代の音韻状態」『言語研究』２，日本言語学会，pp. 48–72，有坂秀世（1957）に再録
有坂秀世（1957）『国語音韻史の研究　増補新版』三省堂
奥村三雄（1973）『聚分韻略の研究　付古本四種影印慶長版総索引』風間書房
木村俊彦・竹中智泰（1982）『臨済宗の陀羅尼』東方出版
木村俊彦（2003）「楞厳呪と白傘蓋陀羅尼――還元サンスクリット本の比較研究――」妙心寺派宗務本所教化センター編『臨済宗妙心寺派教学研究紀要』第１号，妙心寺派宗務本所教化センター，pp. 138–156
木村俊彦（2013）「梵学津梁所収の白傘蓋陀羅尼の研究」『印度學佛教學研究』62(1)，日本印度学仏教学会，pp. 414–421
禪學大辭典編纂所編（1985［初版1975］）『新版　禅學大辭典』大修館書店
高松政雄（1992［初版1982］）『日本漢字音の研究』風間書房
日本中国語学会編（2022）『中国語学辞典』岩波書店
沼本克明（2023［初版1986］）『日本漢字音の歴史新装版』東京堂出版
肥爪周二（2005）「唐音系字音」林史典編『朝倉日本語講座２　文字・書記』朝倉書店，pp. 200–212
平山久雄（2022）『平山久雄　中古音講義』汲古書院
湯沢質幸（1987）『唐音の研究』勉誠社